

令和3年度 第1回 新AI戦略検討会議 議事要旨

1. 日 時 令和3年10月26日(火) 13:00-15:00

2. 場 所 オンライン会議

3. 出席者※敬称略

【新AI戦略検討会議】

座長

北野 宏明 株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所 代表取締役社長
(AI戦略実行会議 構成員)

構成員

安宅 和人 慶應義塾大学 環境情報学部 教授、ヤフー株式会社 CSO
尾原 和啓 フューチャリスト、藤原投資顧問 書生
盛合 志帆 国立研究開発法人情報通信研究機構 サイバーセキュリティ研究所 研究所長
ルゾンカ 典子 元ソニー銀行株式会社 執行役員

【AI戦略実行会議】

構成員

神成 淳司 慶應義塾大学 環境情報学部 教授

【関係省庁】

平本 健二 デジタル庁データ戦略統括
沼田 学 金融庁総合政策局総務課課長補佐
新田 隆夫 総務省国際戦略局技術政策課長
小川 裕之 総務省国際戦略局技術政策課研究推進室長
川口 悦生 文部科学省研究振興局参事官 (情報担当)
高江 慎一 厚生労働省大臣官房厚生科学課研究企画官
杉山 栄里 厚生労働省大臣官房厚生科学課人工知能推進専門官
松本 賢英 農林水産省大臣官房政策課技術政策室長
泉 卓也 経済産業省商務情報政策局情報経済課情報政策企画調整官
野村 至 経済産業省商務情報政策局情報経済課課長補佐
森久保 司 国土交通省大臣官房技術調査課環境安全・地理空間情報技術調整官
伊崎 朋康 国土交通省総合政策局技術政策課技術開発推進室長
加藤 学 環境省大臣官房総合政策課環境研究技術室長

【事務局】

米田 健三 内閣府科学技術・イノベーション推進事務局統括官
井上 諭一 内閣府科学技術・イノベーション推進事務局長補・内閣官房内閣審議官
根本 朋生 内閣府科学技術・イノベーション推進事務局参事官
塚本 武雄 内閣府科学技術・イノベーション推進事務局上席政策調査員

【その他 (説明者)】

山崎 和行 株式会社NTT データ経営研究所

4. 議題

- (1) 新たなA I 戦略の策定に向けた検討について
- (2) 業界におけるA I 実装課題について（有識者プレゼン）
- (3) 他国でのA I 実装に関する調査結果について
- (4) 意見交換

5. 配布資料

- 資料1 新たなA I 戦略の策定に向けた検討について（事務局資料）
- 資料2 A I 社会実装にむけたゲームチェンジと戦略要点（尾原構成員資料、非公開）
- 資料3 イギリス公共部門におけるA I ・データ戦略の調査結果（事務局資料）
- 参考資料1 「新A I 戦略検討会議」の開催について

6. 議事要旨

冒頭、北野座長から挨拶の後、構成員等からそれぞれ挨拶や見解が述べられた。

そのうち、北野座長の挨拶においては、社会実装の推進のほか、教育関係などの取組のフォローアップ、戦略目標0についての掘り下げ、国際連携などの重要性が言及された。

(1) 新たなA I 戦略の策定に向けた検討について

事務局より、資料1に基づき新しいA I 戦略に向けた見直しが必要である背景、検討の方針案、スケジュール案等について説明。その後の質疑応答においては、次のような言及があった。

- ・先行している国に対して、3年で追いつき、5年で追い抜くようなことは、ふつうに考えると極めて困難である。既存の延長では無理だという前提で取り組まなければならない。
- ・追いつき追い越せではなく、新しい軸にいかないと日本は生き残れないかもしれないとの見方もある。
- ・（現在のA I 戦略にて、社会実装の重点分野として掲げられている）一つ一つの分野がとてつもなく広すぎるように思われる。
- ・今回の会議では、どの分野で日本が頑張っていくのかをきちんと議論をすることが大事。関係者の話を聞いて、内容によっては数を減らしてもいい。この数年で他国と日本の差は開いているので、どこなら勝てそうかということを見定めて、そこにリソースを集中するという議論をした方が良い。
- ・官民の役割分担を踏まえての議論が必要。また、高齢化等の状況を踏まえれば、世界市場との接続性を重視した政策を展開することが重要で、国内だけで実装してもスケールは大きくならない。

(2) A I 社会実装に向けたゲームチェンジと戦略要点について

尾原構成員より、資料2に基づきA I がどのように変わってきているのか、どのような戦略に基づいて展開されているか等の情報が、海外におけるA I の社会実装例を交えつつ報告された。その後の質疑応答においては、次のような言及があった。

- ・現代は、ゲームチェンジのタイミングをとらえる発想を持たないと、基本的には全滅をするという局面である。産業刷新のようなレベルを超えて、グリーン、地球との共存などのようにゴールが変わる変化をとらえることが一つの鍵になるのかもしれない。
- ・基本的には追いつくという発想が旧弊で、実際には戦い方を相当変えないと勝てるわけなくて、そうした不連続な変化をどうつかむのかが問題。
- ・他のコピーをして、コピーをしてから独自の拡張をしていくという成功事例もある。

(3) 他国でのA I 実装に関する調査結果について

株式会社 NTT データ経営研究所よりイギリスの公共部門におけるA I・データ戦略の調査結果が報告され、その後議論が行われた。その後の質疑応答においては、次のような言及があった。

- ・イギリスの例で掲げられているように、どの業界であっても対応できるグランド・チャレンジのようなものがあるといい。DXにとどまらず、ジャパン・トランスフォーメーション（JX）と言えるくらい、できるところは片っ端からつぶしていかなければならないという現実もあるので、誰でも参加できるようなかたちの取組になると良い。
- ・イギリスの事例を一つ付けくわえると、Genomics England という試みがある。いわゆる研究開発データの取扱いを決めて、それを基盤とする取組がでてきている。
- ・イギリスの場合、医療データをどう扱うかという立場が明確ということもある。NHSの医療データは、匿名加工などをしたうえで提供している。創薬や感染症対策などのような公共の利益は個人の権利に優先するという方針だが、個人情報には当然守られる。
- ・日本の場合は、研究データを各研究機関に預けたままで利活用されていないという問題がある。

(4) 意見交換

各発表を踏まえ、新A I 戦略会議で検討すべき事項、持つべき問題意識等について、全体を通じた意見交換が行われ、次のような言及があった。

- ・中国では、三十年などの長期的なビジョンに基づく取組ができています。3年、5年といった時間軸で拙速に考えるという手法は見直して、相当根底から見直すべきではないか。
- ・何のためのA I、何のためのDXといったことをちゃんと決めて、共有してビジョンを展開していかないと。投資規模がそもそも違う国には、ふつうは勝てないだろう。ビジョンの根本的な変革を、ちゃんと出していく必要があるのだろう。
- ・自分の世界観としては、オールド・エコノミーとニュー・エコノミーがあって、第三種人類ともいえるサイバー・マインドをもった新しい人たちがいる。この人たちが一方から他方へ移ることがDXと表現される。この視点で見ると、何種類かの取組が必要。これまでのA I 戦略で、人をつくるということはやられてきたが、A I とデータをまわす技術が欠けている。
- ・本質的な勝負所は、パンデミックや災害などへの対処の話など、今までの産業視点ではないところ。そうしたところで、全く新しいゲームを生み出していくということだろう。

今後の検討の進め方については、北野座長から、次のような発言があった。

- ・いろいろな論点があるので、おそらくはかなり議論しないとまとまらないだろう。早急に各省庁から説明を聞いて、検討を進めよう。たぶん、今回の検討の鍵となる方向性やメッセージは、本日の議論でだいぶ言及されている。要するに大規模災害（首都直下型地震、大規模火山噴火、南海トラフ地震、巨大台風など）への対応としての Disaster-Ready、COVID-19 のみならず今後発生しうる新興感染症に対する Pandemic-Ready、サステナビリティ、成長のドライバーとしてのハーベスト・ループ構造の形成などと考える。
- ・時間があまりないので、関係省庁の話聞きつつ、アジャイルに進めていければと考えている。本日は、視線の共有などはできたと思うし、基礎や方向性についてはまあまあできていると思うので、これからよろしくお願ひしたい。

以上